

●《エイシスとガラテア》〜ヘンデル・フェスティバル・ジャパン

研究発表であると覚悟していたので驚いてしまった。確かに、ヘンデル作品の普及をめざす催しの一環として、これまで日本では上演されなかった《エイシスとガラテア》の、

まちがいのない演奏が行われたのだが、成果の発表に終わらなかつた。立派で、退屈どころか、生き生きとして、18世紀のマニアだけでなく、今日の私たちも楽しめる演奏が実現した。

基本はやっぱりチェンバロと指揮の渡辺孝が、適切なテンポを維持しつつ、ヘンデルの豊かな表情を描き出せたことだろう。歌手では辻裕久のエイシスもよかったが、ガラテアを歌った懸田奈緒子にびっくり。明度の高い声と、ノン・ヴィブラートの、まさに現代のバロック復活の要になっている唱法が聴けた。他愛がない当時の牧歌劇やマスクの楽しみがどこにあるのか、よく伝わってきたのは、若々しい演奏のせいだった。

衣装はつけていたが、演技はせず、ちよと中途半端な上演だったし、ぎこちないところもある公演ではあった。だがそれも微笑ましいと思える。そつ、18世紀のロンドンの趣味人たちの集いでは、きつと人は微笑みを浮かべていたのだ、と想像できる《エイシスとガラテア》だったのだ。(12月12日・浜離宮朝日ホール) 堀内修